

日本英文学会九州支部第 68 回大会

期日 2015 年（平成 27 年）
10 月 24 日（土）・25 日（日）

場所 佐賀大学本庄キャンパス
(〒840-8502 佐賀市本庄町 1 番地)

日本英文学会九州支部

〒812-8581 福岡市東区箱崎 6 丁目 19 番 1 号
九州大学大学院人文科学研究院
西岡宣明研究室内
TEL (092) 642-2393 FAX (092) 642-2393
E-mail: nishioka@lit.kyushu-u.ac.jp
HP: <http://kyushu-elsj.sakura.ne.jp>

2015-16 年度 日本英文学会 九州支部 理事一覧

鵜飼	信光	(九州大学)
大島	由起子	(福岡大学)
太田	一昭	(九州大学)
大橋	浩	(九州大学)
木下	善貞	(北九州市立大学名誉教授)
小林	潤二	(鹿児島国際大学)
高野	泰志	(九州大学)
高橋	勤	(九州大学)
竹内	勝徳	(鹿児島大学)
登田	龍彦	(熊本大学)
西岡	宣明	(九州大学)
早瀬	博範	(佐賀大学)
向井	毅	(福岡女子大学)
村里	好俊	(熊本県立大学)
山田	英二	(福岡大学)

2015-16 年度 日本英文学会 九州支部 事務局員一覧

支部長・日本英文学会理事	西岡 宣明
副支部長・日本英文学会評議員	
『九州英文学研究』編集委員長	鵜飼 信光
事務局長	高野 泰志
書記	田中 公介
書記	團迫 雅彦
書記	黒木 隆善
書記	大塚 知昇

佐賀大学アクセス・マップ

〒840-8502 佐賀市本庄町 1 番地 TEL 0952-28-8113 (代表)



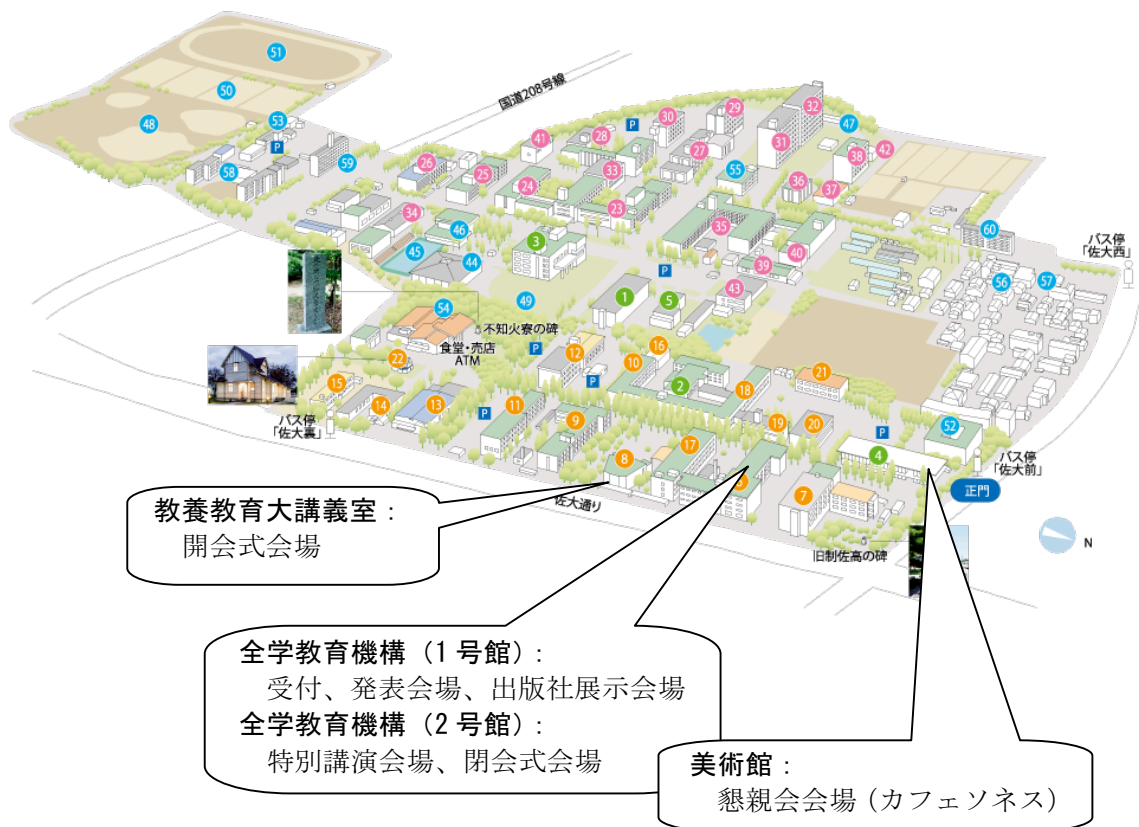
- 佐賀駅バスセンターからバスで約 15 分
「4 番のりば」から市営バス
【 4 番】佐賀女子短大・高校線 (中央大通り・佐大前経由)
【11 番】佐賀大学・西与賀線
【12 番】佐賀大学・東与賀線
【63 番】佐賀女子短大・高校線 (紡績通り・佐大前経由)
で「佐大前」下車
- 佐賀駅からタクシーで約 10 分
- 佐賀空港からタクシーで約 20 分

宿泊施設情報については、下記の英文学会九州支部のホームページをご覧ください。

<http://kyushu-elsj.sakura.ne.jp/>

佐賀大学 本庄キャンパス・マップ

<http://www.saga-u.ac.jp/gaiyo1/campusmap/index.html> をご参照ください。



*車の方は南部バイパス（国道 208 号線）から入講してください。北側の大学正門からの車の乗り入れはできません。

*日曜日は学内の食堂は閉まっております。昼食をご準備いただくか、弁当をご購入ください。弁当 1,000 円（お茶付き）を事前の予約にてご用意いたします。

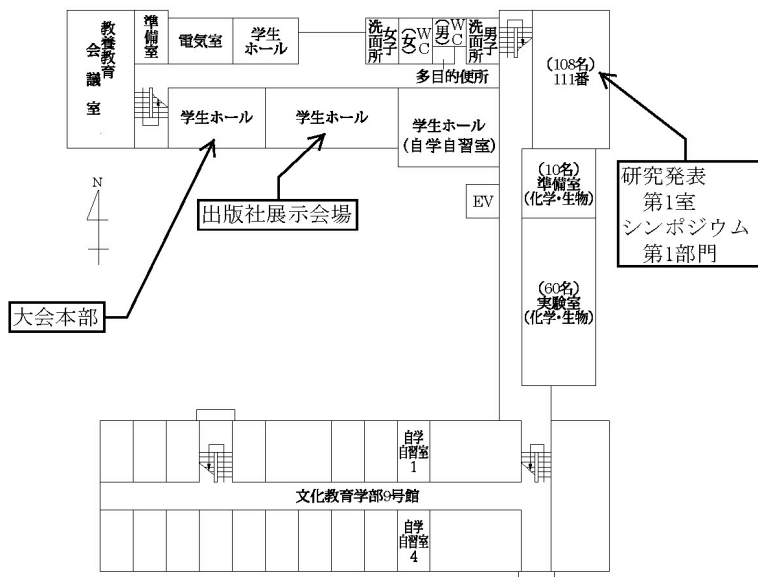
会場案内

佐賀大学 本庄キャンパス

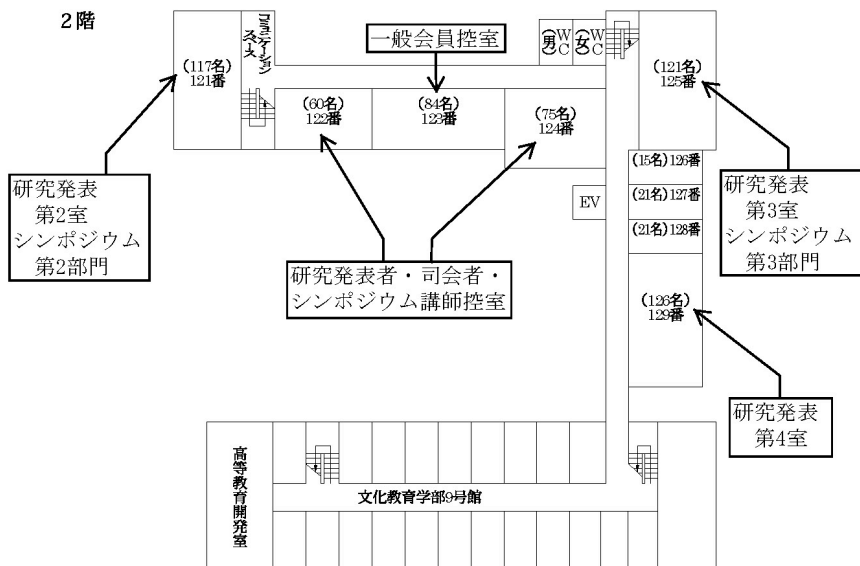
(〒840-8502 佐賀市本庄町1番地)

1号館 受付、発表会場、出版社展示会場

1階

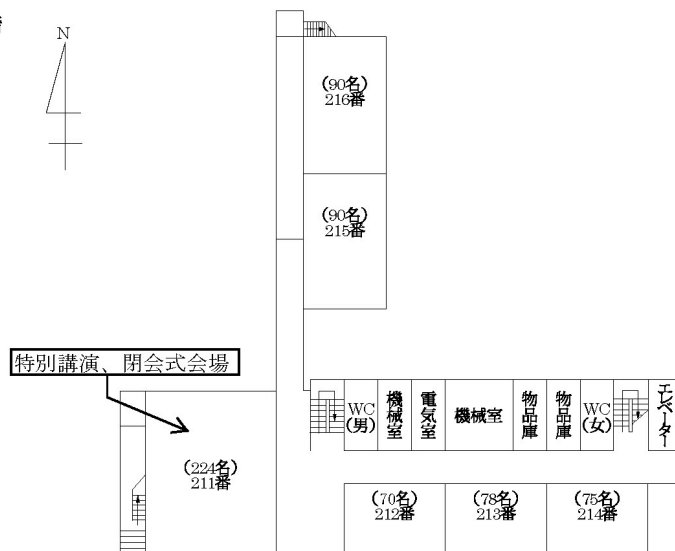


2階

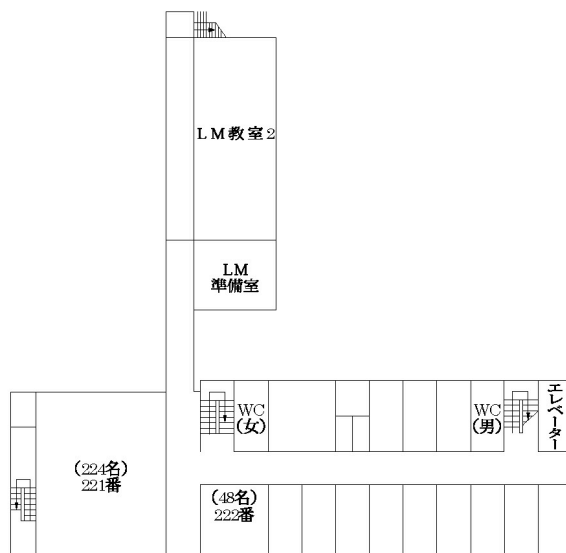


2号館 特別講演会場、閉会式会場

1階



2階



大 会 日 程

10月24日(土)

開 会 式 (13 時)

大講義室

研 究 発 表 (①13 時 30 分 ②14 時 10 分)

第 1 室 (イギリス文学)

111 教室

第 2 室 (アメリカ文学)

121 教室

第 3 室 (英 語 学)

125 教室

シンポジウム (15 時～17 時 30 分)

第 1 部門 (イギリス文学)

111 教室

第 2 部門 (アメリカ文学)

121 教室

第 3 部門 (英 語 学)

125 教室

懇 親 会 (18 時 30 分～20 時 30 分) (会費 5,000 円 学生 3,000 円)

10月25日(日)

研 究 発 表 (①10 時 ②10 時 40 分 ③11 時 20 分 ④12 時 ⑤12 時 40 分)

第 1 室 (イギリス文学)

111 教室

第 2 室 (イギリス文学)

121 教室

第 3 室 (アメリカ文学)

125 教室

第 4 室 (英 語 学)

129 教室

特 別 講 演 (14 時 00 分)

211 教室

閉 会 式 (15 時 30 分)

211 教室

受付

教養教育 1 号館 1 階ホール

研究発表者・司会者・シンポジウム講師控室

122・124 教室

一般会員控室

123 教室

書籍展示会場

教養教育 1 号館学生ホール 1

大会本部

教養教育 1 号館学生ホール 2

日本英文学会九州支部第 68 回大会プログラム

日 時 : 2015 年 10 月 24 日 (土)・25 日 (日)

場 所 : 佐賀大学

第 1 日 10 月 24 日 (土)

(受付は正午より教養教育 1 号館 1 階ホールにて行います。受付では年会費の納入はできません。)

開会式 13 時 00 分より (大講義室)

	司会・九州大学教授	鵜飼 信光
開会の辞	支部長・九州大学教授	西岡 宣明
開催校挨拶	佐賀大学文化教育学部長	甲斐 今日子
開催校案内	佐賀大学教授	早瀬 博範
事務局報告	事務局長・九州大学准教授	高野 泰志
優秀論文賞等選考報告	編集委員長・九州大学教授	鵜飼 信光

研究発表 (①13 時 30 分 ②14 時 10 分)

第 1 室 (111 教室)

- | | |
|--|-------|
| 司会 九州大学教授 | 谷口 秀子 |
| 1. 「怪物」としての革命期のロシア—— <i>Under Western Eyes</i> における時代とイデオロギー | |
| 九州工業大学非常勤講師 | 今川 京子 |

-
- | | |
|---|-------|
| 司会 水産大学校教授 | 高本 孝子 |
| 2. 集める、育てる、操作する——シミュラクル的欲望形態としての <i>The Collector</i> | |
| 北九州市立大学大学院博士前期課程 | 高本 優妃 |

第 2 室 (121 教室)

- | | |
|---|--------|
| 司会 鹿児島大学講師 | 千代田 夏夫 |
| 1. トルーマン・カポーティとフィクションの力——『冷血』の虚構性に関する考察 | |
| 九州大学大学院博士後期課程 | 高田 とも子 |
2. アーネスト・ヘミングウェイの『エデンの園』における白さの問題
——キャサリン・ボーンの人種に関する強迫観念を中心に
- | | |
|---------------|-------|
| 九州大学大学院博士後期課程 | 内田 水生 |
|---------------|-------|

第 3 室 (125 教室)

- | | |
|---|-------|
| 司会 宮崎公立大学教授 | 福田 稔 |
| 1. 英語関係節の非制限用法についての考察——Adjunction 分析を用いた LF 移動アプローチ | |
| 福岡大学大学院博士後期課程 | 濱保 義宏 |
2. A Contrastive Study of Negative Polarity Items between Chinese and English : The Case of *renhe* and *any*
- | | |
|-------------|-------------|
| 九州大学大学院修士課程 | WANG JINDAN |
|-------------|-------------|

シンポジウム (15 時～17 時 30 分)

第 1 部門「イギリス文学」(111 教室)

英文学の公共的性質——文学と国民意識との関連

司会・講師	大分大学准教授	園井	千音
講師	福岡女学院大学非常勤講師	杉本	美穂
講師	同志社大学教授	金谷	益道

第 2 部門「アメリカ文学」(121 教室)

パフォーマンスから読み直すアメリカ文学

司会・講師	九州大学准教授	岡本	太助
講師	九州大学大学院博士後期課程	幸山	智子
講師	慶應義塾大学教授	大和田	俊之
講師	熊本県立大学准教授	坂井	隆

第 3 部門「英語学」(125 教室)

最新文法理論の射程

司会・講師	長崎大学教授	廣江	顕
講師	福岡工業大学教授	古川	武史
講師	産業医科大学助教	下仮屋	翔
講師	九州大学大学院博士後期課程	永次	健人

懇親会 (18 時 30 分～20 時 30 分)

場所 佐賀大学美術館内 CAFE SONESS (会費 5,000 円 学生 3,000 円)
(〒840-8502 佐賀市本庄町 1 番地佐賀大学美術館内／TEL 0952-40-2911)
【懇親会場へのアクセス→学会会場 (佐賀大学) から徒歩 1 分】

第 2 日 10 月 25 日 (日)

(受付は 9 時 20 分より教養教育 1 号館 1 階ホールにて行います。受付では年会費の納入はできません。)

研究発表 (①10 時 ②10 時 40 分 ③11 時 20 分 ④12 時 ⑤12 時 40 分)

第 1 室 (111 教室)

司会 九州工業大学教授 虹林 慶

1. 【発表者の都合により中止】

2. 『ドン・ジュアン』にみる読者との協働執筆——虚構空間での応答関係をめぐって

津山工業高等専門学校講師 山口 裕美

3. 共作『アテネのタイモン』におけるアナモルフォーズ

司会 筑紫女学園大学准教授 高森 暁子

西南学院大学非常勤講師 雨森 未来

4. 『フォースタス博士』における善と悪

司会 鹿児島国際大学教授 小林 潤司

熊本県立大学大学院博士後期課程 山田 佳子

5. 『初期英国演劇資料集』(*Records of Early English Drama*)を読む
——特権劇団としての宮内大臣一座・国王一座——
(招待発表) 九州大学教授 太田 一昭

第2室 (121 教室)

- 司会 山口大学教授 池園 宏
1. 幽霊、疫病、占星術——*The Haunted Man* における近代的社会意識形成と得体の知れないメディア
北九州市立大学大学院博士後期課程 原田 昂

-
- 司会 山口大学教授 宮原 一成
2. 反ヒロイン、パスシバの成長とグランディズム——『狂乱の群れを離れて』再読
福岡女学院大学短期大学部准教授 今村 紅子

3. Wild Irish and Gentle English Stereotypical Imagery in Grace Stebbing's "Wild Kathleen, or Both Sides of the Channel"
鹿児島大学大学院博士後期課程 Nikolay Gyulemetov

-
- 司会 九州大学教授 鶴飼 信光
4. 出版文化的視点からみる18世紀イギリス小説——作家、書籍商、そして読者
(招待発表) 活水女子大学教授 井石 哲也

-
5. 【発表なし】

第3室 (125 教室)

1. 【発表なし】

-
- 司会 九州大学准教授 下條 恵子
2. Tim O'Brien の *If I Die in a Combat Zone* と *The Things They Carried* における戦争体験の記憶と「真実」
熊本県立大学大学院博士後期課程 三牧 史奈

-
- 司会 近畿大学准教授 青井 格
3. ドナテロとジュリア・パストラーナ——『大理石の牧神』におけるノンデスクリプト表象
長崎県立大学特任講師 生田 和也

-
- 司会 九州大学教授 小谷 耕二
4. Karen Tei Yamashita の文学の境域性
——ローカリティとグローバリティにおける日系アメリカ人文学の再定位
(招待発表) 琉球大学教授 喜納 育江

-
5. 【発表なし】

第4室 (129 教室)

1. 【発表なし】

-
- 司会 熊本大学教授 登田 龍彦
2. 提示の There 構文に関する統語的考察
九州大学大学院修士課程 福地 瑤美
-

司会 産業医科大学講師 田中 公介
3. 空移動仮説の再検討——自由併合と素性継承の観点から

福岡大学外国語講師 谷川 晋一

司会 福岡大学教授 古賀 恵介
4. 日英語の構文ネットワーク構造の広がり

(招待発表) 熊本県立大学教授 村尾 治彦

5. 【発表なし】

特別講演 14 時 00 分より (211 教室)
京都大学大学院教授 佐々木 徹
「小説と映画について」

司会 九州大学教授 鵜飼 信光

閉会式 15 時 30 分より (211 教室)
挨拶

佐賀大学教授 木原 誠

〈第1日〉10月24日（土）

研 究 発 表

第 1 室 (111 教室)

司会 九州大学教授 谷口 秀子

1. 「怪物」としての革命期のロシア

——*Under Western Eyes* における時代とイデオロギー

九州工業大学非常勤講師 今川 京子

19 世紀末から 20 世紀初頭にかけては近代化の矛盾が限界に達し、各権力機関の権威が次々と失墜していった時代であった。そして時代のムーブメントとして革命という社会現象が多く見られるようになっていった。殊にロシア革命前夜のロシアはテロリズムの温床であり、革命勢力と独裁体制である政府機関との間で激しい対立が繰り広げられていた。このロシア革命がヨーロッパ全土に与えた衝撃と戦慄的恐怖は計り知れないほど強烈であった。このような世界内状況を反映させた小説が Joseph Conrad (1857-1924) の *Under Western Eyes* (1911) である。ロシア革命とは、20 世紀という未曾有の世界戦争という時代の到来を告げる社会現象と言っても過言ではない。

本発表では *Under Western Eyes* の主人公 Razumov の運命越しに、Conrad がロシアを時代を象徴する「怪物」として捉えていたことと、世界大戦に通じるイデオロギー闘争の虚偽性をヴィジュアル化するトポグラフィーとして意識していたことを論証する。

司会 水産大学校教授 高本 孝子

2. 集める、育てる、操作する

——シミュラクル的欲望形態としての *The Collector*

北九州市立大学大学院博士前期課程 高本 優妃

John Fowles の処女作 *The Collector* は、大量消費によってあらゆる事物がその本来の姿を失い、記号となって消費される社会——Jean Baudrillard がオリジナルなきコピー（シミュラクル）と呼ぶ記号の戯れとしての社会——を背景として持っている。本作品の中心テーマであるコレクションとは蒐集対象を記号として手元に保管する行為で、記号と化した事物と戯れるシミュラクル的な遊びである。本発表ではこれを現代の電子ゲーム（人間の欲望を具現化して消費させることを目的としたメディア）の代表的なパターン、すなわち「蒐集」「育成」「シミュレーション」の形式と比較する。Miranda は Clegg の欲望の物語を時間軸に沿って段階的に実現していくメディアであり、その大量消費社会の大衆的欲望の単純化である電子ゲームのパターンとの重なりは、Clegg の欲望の形が、まさにボードリヤールのシミュラクル的欲望の形態をとっていることを示しているであろう。

第 2 室 (121 教室)

司会 鹿児島大学講師 千代田夏夫

1. トルーマン・カポーティとフィクションの力

——『冷血』の虚構性に関する考察

九州大学大学院博士後期課程 高田とも子

1960 年代米国における文学とジャーナリズムの連関を巡る議論で注目すべき点として、50 年代までフィクションによって支配されていた文学空間にノンフィクションが入り込み、「実際に起こった出来事」を、小説的想像力を駆使した手法で描くという動きが見られるようになったことが挙げられる。この新たな文学ジャンルをトム・ウルフは「ニュージャーナリズム」と名付け、その隆盛が米文学空間にとって大きな転換点となりうるだろうとの見解を示したが、「物語るジャーナリズム」というジャンルが確立していったことは、フィクションの減速を意味してもいた。

トルーマン・カポーティの『冷血』(1965)、及びカポーティを「主人公」としたジェラルド・クラークによる伝記『カポーティ』(1988)は、上記に挙げた文学史における虚構/事実を巡る議論に対し重要な示唆を与えるテキストだ。クラークは『冷血』の最終章が、カポーティによる完全なる「偽装」であったと暴いているが、この箇所は本テキストが何年にも及ぶ濃密な取材を行うというジャーナリズム的方法に依拠している限り、不適切なものであるとする見方がある。しかし、本論において提起したい問題が、本テキストの「虚構性」こそが、実は 20 世紀中盤のアメリカ社会において、フィクションによる「物語の復活」を目指す重要な役割を担っているのではないかという点だ。本論では、『冷血』の最終局面における「偽装」を、1960 年代の「物語るジャーナリズム」が成し得なかった欠落を埋めるものであったという可能性を視野に入れ、事実/虚構を巡る議論に対し有効な応答を為し得たフィクションの側からの挑戦として捉え、検証することを目的とする。

2. アーネスト・ヘミングウェイの『エデンの園』における白さの問題

——キャサリン・ボーンの人種に関する強迫観念を中心に

九州大学大学院博士後期課程 内田 水生

1986 年、大胆な編集を経て死後出版された『エデンの園』は、人種、ジェンダー、創造性という観点を軸に様々に読み解かれている。しかしながら、その多くは登場人物の人種意識を性やジェンダーの問題に還元しており、そこにはさらなる研究の余地がある。確かに、作品中に見られる人種意識は性やジェンダーの問題と切り離せない。しかし例えば、作品中で日焼けが登場人物の性的興奮を高める手助けとなっていることのみに着目し、人種越境は作家の創造力につながる様々な性的試みの一形態であると解釈してしまえば、作品の根底にある白人性の問題は殊更見えにくくなってしまう。したがって本発表では、作品に描かれる「白さ」を考察することによって、キャサリンの人種に関する強迫観念が、彼女自身の「白さ」に起因するものであることを確認したい。さらにヘミングウェイのアフリカに関する他作品との関連性を考察することによって作者の人種意識を再考したい。

第 3 室 (125 教室)

司会 宮崎公立大学教授 福田 稔

1. 英語関係節の非制限用法についての考察

——Adjunction 分析を用いた LF 移動アプローチ

福岡大学大学院博士後期課程 濱保 義宏

英語における関係節非制限用法と制限用法の違いとして、前者はその意味や主節内要素の *scope* から除外されるなど、主節と分離しているように振舞うことが知られている。本発表では、このような非制限用法の持つ特徴について、Raising 分析 (Kayne (1994)) や Orphanage 分析 (Cinque (2008)) では説明できない点のあることを指摘し、対案として Adjunction 分析 (Del Gobbo (2003, 2007)) による説明を提案する。この分析は、非制限用法関係節が統語構造上で先行詞 DP へ右方付加し、LF においては独立した節として解釈され主節 CP に右方付加する位置へと移動する、というものである。

本発表ではこの分析を取り入れるが、同時に Del Gobbo の主張するところの LF 移動の理由については疑問が残ることを提示し、最終的には、独立した illocutionary force/clause type を持つことによる移動であるという説明へと発展させていく。

2. A Contrastive Study of Negative Polarity Items between Chinese and English: The Case of *renhe* and *any*

九州大学大学院博士後期課程 WANG JINDAN

This study is a tentative research to characterize the syntactic properties of negative polarity items through the observation of the phenomena in Chinese and English, paying attention to the contrast between *renhe* and *any*.

- (1) a. I have*(n't) got **any** medicine.
b. wo *(bu) renshi **renhe ren**.
I not know any person
"I don't know anybody"
- (2) a. ***Any student** did not come to school.
b. ***renhe** xuesheng meiyou wenti.
any student not have questions
"No students have questions."
- (3) a. Did you eat anything?
b. ni chi ***renhe/shenme** dongxi le ma?
you eat any/what thing ASP Qu?
"Did you eat anything?"

There are both similarities and differences between the NPIs in Chinese and English. Although both require negative expressions with a specific syntactic relation as in (1) and (2), *renhe* cannot be used in questions unlike *any*, as in (3). In place of *renhe*, an indefinite wh-phrase *shenme* is widely.

In this study I want to explicate the distribution of *renhe* and identify its NPI status in light of the minimalist theory. Based on this syntactic study, I want to see whether Chinese has the same structure as English in negative sentences.

シンポジウム

第1部門「イギリス文学」(III 教室)

英文学の公共的性質——文学と国民意識との関連

司会・講師 大分大学准教授 園井 千音
講師 福岡女学院大学非常勤講師 杉本 美穂
講師 同志社大学教授 金谷 益道

通常、文学も、他の芸術的、哲学的、社会的その他の人間精神の発現様式と同様、時代と社会の影響を受けて生まれ、あるいは時代と社会に影響を与える。本シンポジウムでは、特に英文学におけるこの性質に注目し、かつ、英文学が時代や社会精神を反映するという側面より、むしろポジティブにそれらに影響を与える役割を果たしてきたことについてその特質を分析する。

今回はその働きがイギリスの国民性もしくは国民意識の形成に寄与したとする認識に立ち、特にルネサンス期、ロマン派期、20 世紀文学を中心にその本質を検証する。イギリスの社会と文化は 16 世紀以降の複雑な近代化の過程で、いわば歴史的必然としてその時代の国民意識及び国家意識を構築したといえるが、イギリスの場合は、その形成過程において示した文学の役割は特徴的であり、それをイギリス文学の公共的性質と呼ぶことができる。本シンポジウムにおいては、最終的にはイギリス文学の性質が以上の論点も含み複合的であることを考察したい。

エリザベス朝における文学と国民意識

杉本 美穂

本発表の目的は、近代初期英国の文学における国民意識の探求である。即ち、英国に国民国家意識が萌芽するエリザベス朝において、イングランドを中核とした国家が、ブリテン島およびアイルランド島の諸民族との複雑な関係性のなかで、いかにして共同体を構築していったのかを、理論と実践との両面から検討する。

まず、女王の寵臣、サー・フィリップ・シドニーの『詩の弁護』(1595)を取り上げる。この英文学史上初の詩論（現代の文学理論に相当）は、15 世紀に再発見されたアリストテレスの『詩学』を踏襲し、文学の道徳的な目的を趣意とする。詩とは「教え、かつ楽しませる」というシドニーの指針が支配層の教化と国家意識の強化を企図していた様を明らかにしたい。次に、ウィリアム・シェイクスピアの『ヘンリー五世』(1599)を取り上げ、劇場における英国歴史劇と庶民の国民意識形成との相互関係を考察したい。対仏戦争で大勝利を収めた 15 世紀の英国王を描いたこの歴史劇では、複雑に入り組んだ他者の排除と包摂による、英国の自己形成の過程が見られる。

ロマン主義文学における公共的性質とイギリス社会の関係

園井 千音

本発表では特にイギリスロマン主義文学の 1790 年代から 1820 年代にかけての詩作が、イギリス国内の共和主義思想の盛衰、フランス革命との関係、対フランス戦争などの社会的政治的変動との関連において、それぞれの詩人の表現には主張の濃淡や立場の違いが見られるにせよ、社会の改革とは、人間の自由とは、守るべき価値とは、等の主題について、ある共通する認識と価値観がある。それを要約的にイギリス文学の公共的性質と呼ぶことができる。それは、一つの見方においては、文学が時代と社会の産物であるというより、むしろ読者の国民意識ないしは国家意識に働きかける道徳的役割を持つともいえよう。これらの見方について、ワーズワース、コールリッジ、サウジーの作品を中心に検証する。

20 世紀初頭のイギリス小説と国民性の問題 ——帝国主義、コスモポリタニズム、フェミニズム

金谷 益道

20 世紀初頭、イギリスの作家たちは、伝統的なイギリス人の国民性の分析を盛んに行った。しばしば“John Bull”に擬人化された伝統的なイギリス人の気質は、作家たちの評論や小説の中で、分析されると同時に懐疑的に見られはじめ、影響を受けた多くの読者は、“John Bull”像とも関連が深い帝国主義的政策に代表される長年の国民的な讃美の対象を疑いだした。本発表では、20 世紀初頭のイギリス小説家—特にフォースター、キップリング、コンラッド—の作品によく現れる、「私はだれなのか」というアイデンティティに関する問い、中産階級の登場人物に結び付けられる「空虚さ」、象徴を理解し表現する能力を失う「表象不能症」、といったモチーフに着目し、これらのモチーフが作家たちの国民性の更新への渇欲と関連していたことを論じたい。またどのような新たな国民性をイギリス人に付与したいと作家たちが望んだのか、当時のコスモポリタニズムやフェミニズム運動などとの関連から探ってみたい。

第2部門「アメリカ文学」(121教室)

パフォーマンスから読み直すアメリカ文学

司会・講師 九州大学准教授 岡本 太助

講師 九州大学大学院博士後期課程 幸山 智子

講師 慶應義塾大学教授 大和田俊之

講師 熊本県立大学准教授 坂井 隆

レイモンド・ウィリアムズはかつて、文化研究の用語のうちでもっとも定義の難しいものは他でもない「文化」であると述べたが、今日の文化・文学批評で幅広く用いられる「パフォーマンス」は、それに負けず劣らず定義しづらい用語である。1960年代に、従来のテキスト依存型の演劇研究への反発として始まったパフォーマンス研究は、演劇や文学の範疇にとどまることなく、文化人類学、社会学、政治学などと領域横断的な関係を切り結ぶ研究分野へと発展を遂げた。観客や参加者に働きかけ、その交渉過程において何らかの効果を生み出すもの全てがパフォーマンスであるとすれば、パフォーマンス研究の本質は、テキストの意味を読み解く解釈学から、意味が効果として発生する過程を探る形式論への方法論的転回にあるといえる。本シンポジウムでは、演劇や音楽、映画や小説といった異なるメディアにおける実践を分析し、パフォーマンス研究と文学研究との再接合を試みたい。

ことばと身体のパフォーマンス——ソール・ベローの50年代再考

幸山 智子

1950年代、Saul Bellow はことばを発することによって「ユダヤ系」という枠組みをこえた「アメリカ人作家」としての主体構築を目指していた。作家の試みは（冒頭で“I am an American”と宣言する Augie March など）テキスト中の発話としても変奏・反復されるのだが、その過程で生じる他者の視線との軋轢やそれに起因する憂鬱はしばしば「麻痺」や「病」などの身体的な感覚（の比喩）として描かれているようだ。この点、初めて WASP 男性が主人公に据えられた *Henderson the Rain King* (1959)において「麻痺」を癒す身体的実践が見られることは興味深い。顔や身体が「魂の書物」と喩えられることで、身体的実践（パフォーマンス）はメタ・レベルで書くことによる主体構築（パフォーマンスティヴ）へ再接続してゆくのだ。本発表ではこの点を軸に、テキストをインターフェースとしながら複数のレベルで展開する〈パフォーマンス〉を考え、今年で生誕100周年を迎える作家とその作品群に新たな角度から光をあてたい。

ニューヨーク・アヴァンギャルドと音楽のパフォーマンス——フルクサス再考

大和田俊之

1960年前後に生起したフルクサスは、1950年代後半のニューヨーク・アヴァンギャルドに影響を受けた前衛的なムーヴメントである。その「反芸術」的で「反商業主義」的な活動はアートやダンス、詩など多岐にわたるが、なかでも音楽が中心的な役割を

果たしたといってもいいだろう。では、ラ・モンテ・ヤングや一柳慧などフルクサスに参加した音楽家にとって「パフォーマンス」とはいかなる意味——歴史的にも形式的にも——を持っていたのだろうか。たとえば、同じ時期にニューヨークを重要な拠点としながら、フルクサスのメンバーにとってメンターの立場にあたるジョン・ケージは、同時代のもっともパフォーマンス的な音楽ジャンルといえるジャズに否定的であったことがよく知られている。本発表では、ブラック・マウンテン・カレッジからフルクサスにいたるアメリカの「前衛」の系譜を〈音楽〉とパフォーマンスの関係を中心にあらためて検証したい。

＜傷ついた皮膚＞のパフォーマンス——現代アメリカ演劇と「痛み」

坂井 隆

一見、無関係のように思えるが、「痛み」と「演劇」との間には実は強い親和性がある。歴史家 Javier Moscoso によれば、人間の痛みや苦痛を描いた絵画は極めて「演劇的」(theatrical)であり、そこには、あらゆる演劇的要素が盛り込まれている。さらに、絵画の中の苦悶する犠牲者は、痛みだけではなく、あたかも舞台俳優であるかのように「観られている」ことも感じているという。また、演劇理論家 Hans-Thies Lehmann は、演劇はつねに苦痛によって魅惑されてきたと指摘する。このような苦痛と演劇との関係は、作品中で表現される痛み、または、生身のパフォーマーが実際に身体に感じる痛みとして立ち現れると先ずは了解できよう。本発表の目的は、この視点をさらに一歩進めることにある。

特に今回は、痛みの最も直截的な表現である「皮膚の傷」に注目して Tennessee Williams や Rajiv Joseph (そして、可能ならばイギリスの劇作家 Sarah Kane) の戯曲、さらには、Vito Acconci や Ron Athey といったパフォーマンス・アーティストの作品を分析し、痛みが孕む演劇性というものを明らかにしてみたい。

建物と怪物——現代アメリカ小説におけるパフォーマンス

岡本 太助

小説のテキスト構造を家屋や建築物になぞらえる言説は古くから存在するが、時代とともに建築の概念が変容するのに呼応してか、小説テキストの空間的特性もまた変化してきた。殊にポストモダン小説においては、本来は物語の背景であるはずの屋内空間そのものが主要な役割を付与され、あたかもそれ自体が命を吹き込まれたかのように蠢く怪物となり、登場人物のみならず、小説テキストの空間までも呑み込んでしまうというケースが多々見られる。本発表では、Ellen Bryson の *The Transformation of Bartholomew Fortuno*、Steven Millhauser の “The Barnum Museum”、Mark Z. Danielewski の *House of Leaves* などを例にとり、現代アメリカ小説におけるテキストとアーキテクチュアの関係 (Evelyn Ender の用語を借りれば、「アーキテクスト」) を検討し、そのテキスト的パフォーマンスの効果を探る。前者二作では、バーナム・ミュージアムをめぐる異なる二つのアプローチを比較検討し、後者ではゴシック・ホラーのジャンルの情報化時代における変容を分析する。

第3部門「英語学」(125 教室)

最新文法理論の射程

司会・講師 長崎大学教授 廣江 頤

講師 福岡工業大学教授 古川 武史

講師 産業医科大学助教 下仮屋 翔

講師 九州大学大学院博士後期課程 永次 健人

生成統語論に関する理論的研究は、Chomsky (1995)で提唱されたミニマリスト・プログラム、とりわけフェーズ(phase)という派生単位に関する作業仮説のもと(Chomsky (2000, 2001, 2008)), 進展をしてきている。

しかし、その一方で、生成文法の研究対象として積極的な形で取り上げてこなかった、英語に関するさまざまな周辺的事実に対して、最新理論がどういう説明を与えることが可能なのか、また新しい事実の発掘にどういう形で貢献できるのか、さほど明らかになっていないとは言えない。

本シンポジウムでは、まず、名詞句からの外置(extraposition)を取り上げ、近年活発な議論が行われているラベルシステム(labeling algorithm) (Chomsky (2013, 2014))との関連で捉える試みを行う。次に、これまで散発的に扱われてきた動名詞構文(gerund)を取り上げ、先行研究ではほとんど注目されることのなかった要素の抽出に関する事実を提示し、最新理論(統語論)の射程で十分捉えられることを示したい。最後に、文断片(fragment)や描出話法(free indirect speech/represented speech)といった、これまで生成文法の理論的研究の対象としてほとんど扱われたことのない言語事実を取り上げ、最新理論が十分な形で説明を与えることが可能なのか、もし可能でないとしたらどんなアプローチが可能なのか、あるいはインターフェイスとの相互作用で解決を試みるのが可能なのか等々、最新理論の射程を明らかにしたい。

描出話法の文法特性

廣江 頤

英語には、話法に関して、以下(1)に例示されているように、直接話法(direct speech)、間接話法(indirect speech)、それに描出話法(free indirect speech/represented speech)という三つの文体がある。

- (1) a. The small boy could not understand. He thought, “What is work? Why is my brother working? What delight comes to a man from working?” (direct speech)
- b. The small boy could not understand. He asked himself what work was, why his brother was working and what delight came to a man from working. (indirect speech)
- c. The small boy could not understand. What was work? Why was his brother working? What delight came to a man from working? (free indirect speech)

生成文法の理論的研究という文脈では、描出話法そのものは研究対象として取り上げられることがほとんどなかった。しかしながら、Crnič and Trinh (2009)において命令文

が従属節に埋め込めるとする主張以来、命令文のみならず従属節に一般には現れないと考えられてきた根文(root sentences)が描出話法という環境下では現れうることが指摘されてきた(Hiroe (2013, 2014))。

本発表では、描出話法文はどのような構造的ステータスで埋め込まれているのか(あるいは埋め込まれていないのか)、もし埋め込まれていると仮定すれば、主節とは異なる発話行為が埋め込まれている証拠となるのか、という2つの観点から考察を加えることで、描出話法文のもつ文法特性を可能な限り明らかにしたい。

名詞句からの外置とラベルシステム

古川 武史

名詞句からの外置の現象(1)は、生成文法の研究において長年研究されてきている。

(1) I saw a boy yesterday that I didn't know.

統語論において、この現象には主に二つの提案がある。一つは、右周辺部すなわち文末への移動が関与するという(右方)移動分析である。

(2) I saw [_{DP} a boy *t*_{CP}] yesterday [_{CP} that I didn't know].

もう一つの提案は、外置要素は、移動ではなく、文末に直接導入され、被修飾要素と何らかの解釈規則により関連づけられるという基底生成分析である。

(3) I saw [_{DP} a boy] yesterday [_{CP} that I didn't know].

(2)のような右方移動分析を採用するならば、左方移動の局所性・境界性の違い、右方移動の随意性、移動を駆動するものは何か、構造上どの位置へ移動し、また、なぜその位置へ移動しなければならないのかなど、右方移動の特異性について原理的な説明が必要となる。

外置要素は、Internal Mergeすなわち移動ではなく、External Mergeによって文末に導入されるとする分析を採用すると、外置要素とその被修飾要素はどのようなメカニズムによって捉えられるかを説明しなければならない。

どちらの分析を取るにしろ、名詞句からの外置が示す左方移動の特質との類似点や相違点に対して、例外的な扱いをせずに、自然な説明がなされなければならない。

さらに、近年の Chomsky (2013, 2014)の主張によると、Internal Merge、External Merge どちらも同じ単一の Merge という操作であるとし、Merge over Move は、ラベルシステムにより導き出せ、破棄することが可能となる。Merge という単一の操作が自由に適用され、その結果構築された構造は transfer や解釈(interpretation)のために phase レベルで評価(evaluate)される。この Chomsky の想定が正しいならば、外置要素は、phase 単位で被修飾要素と適切に関連づけられなければならないことになるが、特別な規定を設けずに名詞句からの外置の自然な分析が可能かどうか検討の余地があると思われる。

本発表では、名詞句からの外置の特質が最近のミニマリスト・プログラムの枠組、ラベルシステムのもと、どのような説明が可能かを検討し、この現象の新たな分析を提案したい。

周辺現象と Minimalist——動名詞構文の観点から

下仮屋 翔

英語の動名詞構文は、生成文法の歴史において周辺のしか扱われてこなかった。しかしながら、動詞句の特性を有する一方で、名詞句と同様にその分布が格位置に限られるという本構文の特性が、理論上どのように捉えられるのかという問題は決してなおざりにすることはできない。

これまで体系的に研究を行っているものとしては、GB 理論の枠組みに基づく Abney (1987)や Phase 理論の枠組みに基づく Pires (2006)が挙げられるが、本発表では両分析にかかる問題点を指摘した上で Phase 理論に立脚した独自の分析を提示していく。それにより、動名詞構文の統語的特性を捉えるとともに、定形節との構造的平行性ならびに統語素性の差異を浮き彫りにすることで、CP 構造ながらも要素の抜き取りが可能である事実を原理的に説明していき、本構文が近年の Minimalist の射程に十分収まっていることを明らかにする。

文断片と言語インターフェイス理論の射程

永次 健人

本発表では、省略現象の一種である文断片(Sentence Fragment)について、最新のミニマリストを含む標準的な統語理論からのアプローチの限界を示し、省略現象及び文断片の説明に適した言語インターフェイスの理論について考察する。省略現象については、発音されない表示レベルで完全な統語構造を想定する削除分析が標準的な分析として確立し、文断片にも拡張されてきた。文断片の削除分析では、文断片が左端領域に移動すると想定されるので、文断片は削除と移動という標準的な統語理論の基本的概念の経験的妥当性を検証し、更には、標準的な言語インターフェイス理論の妥当性をも検証する試金石となりうる。具体的には、島の制約の関係するデータと節の文断片のデータから削除分析の経験的問題を示し、文断片が完全な統語構造を持たないことを論じる。そして、直接生成された構造物としての文断片が、どのような言語インターフェイスの想定の下で説明されるのかを考察する。

〈第2日〉10月25日(日)
研 究 発 表

第 1 室 (111 教室)

司会 九州工業大学教授 虹林 慶

1. 【発表者の都合により中止】

2. 『ドン・ジュアン』にみる読者との協働執筆

——虚構空間での応答関係をめぐって

津山工業高等専門学校講師 山口 裕美

1812年に刊行された『チャイルド・ハロルドの巡礼』は、印刷物の波及効果を世に知らしめた作品のひとつである。現代の情報社会では当然のこととして受け入れられる現象——例えば、大容量の情報を不特定多数の受容者に瞬時に送り出すことのできる技術、一度送り出されてしまった情報を否定もしくは削除することの困難さ（現代ではいわゆる「デジタルタトゥー」と呼ばれるもの）——を実際に体感したバイロンは、その後の執筆活動をおこなううえで、読者の反応に意識的にならざるを得なかった。そのことを示すように『ドン・ジュアン』では随所で語り手「わたし」は、紙面の向こう側に読み手が存在していることを前提として、「読者」に呼びかけをおこなう。本発表では、大量印刷による情報発信がもたらした作者対読者の応答関係を意図的に利用することで、バイロンが読者と協働しながら『ドン・ジュアン』を創りあげたことを論じたい。

司会 筑紫女学園大学准教授 高森 暁子

3. 共作『アテネのタイモン』におけるアナモルフォーズ

西南学院大学非常勤講師 雨森 未来

近年のシェイクスピア研究では、他の劇作家と共作を行ったシェイクスピアに対して注目が向けられている。この背景には、印刷された活字を通じてシェイクスピアの権威‘authority’が形成されてきたことに対する反動があり、失敗作として軽視されてきた共作に対する再評価が行われている。本発表では、ミドルトンとの共作である『アテネのタイモン』をとりあげる。分担作業と同時進行を経て完成したこの劇には、制作の段階においてすでに二人の劇作家による異なる二つの視点が内在する。舞台上では、相反する主人公の姿、栄華を体現するタイモンと凋落して豹変するタイモンが登場する。タイモンに向けられる対照的な二つの視点が一種のアナモルフォーズとして形成されることを主張したい。さらに、シェイクスピアが冒頭で登場させた詩人と画家が終盤で再度舞台にあげられ、タイモンによってアナモルフォーズの餌食にされる。シェイクスピアがミドルトンによる3幕6場を念頭に置き、宴会の場におけるタイモンの復讐を5幕1場で再構築してみせることを分析する。

4. 『フォースタス博士』における善と悪

熊本県立大学大学院博士後期課程 山田 佳子

クリストファー・マーロウ (1564 - 1593) の『フォースタス博士』(1592) において、主人公フォースタスの悲劇における超自然的脈絡と、悪と苦悶という神学的概念が劇の中心を占める点で、本作は前時代の道徳劇の系譜に連なるように見える。しかし、フォースタスの人物像がエリザベス朝悲劇の登場人物の中で最も個性化されたものの一つであること、主人公を破滅へと導こうと試みる悪役が道徳劇の伝統であるいわゆる Vice ではなく、Devil であるということ、また、観客への直接的な教訓めいた台詞がないことで、特異な意味を持つ作品に数えられる。

伝統的な道徳劇においては、数々の美德・悪徳が抽象的な存在としてではなく、実際に舞台の上に外的に具現化された視覚的人物として登場するが、『フォースタス博士』においては、いわば主人公自身の内部に存在している。その一方で、劇の中で命を与えられた人物として登場する唯一の抽象物である〈七つの大罪〉は、単なる象徴的な装飾品に過ぎないように描写される。本発表では作品におけるフォースタスの行動力の源泉が、彼の魂の道徳的中心にあることを探っていきたい。

5. 『初期英国演劇資料集』(*Records of Early English Drama*) を読む

——特権劇団としての宮内大臣一座・国王一座——

九州大学教授 太田 一昭

REED (*Records of Early English Drama*) は、英国各地に現存する 16～17 世紀の演劇関係一次資料を収めた浩瀚な文献である。1979 年出版のヨークの資料集を皮切りとして、現在までに 23 の地域の記録が刊行されている。*REED* から見えてくることは多い。たとえば、1583 年に結成された女王一座とシェイクスピアが所属する宮内大臣一座は特権的な劇団であったこと。

女王一座が特権劇団であるのは、地方巡業を最も旺盛に行った劇団であり、また上演地の自治体より支払われる謝礼の金額が大きく、別格であったからである。宮内大臣一座が特権劇団であったというのは、女王一座とは意味合いが異なる。宮内大臣一座は、女王一座とは対照的に、地方巡業が非常に少ない劇団であった。宮内大臣一座はおそらく、旅回りの必要が小さい特権的な劇団であった。宮内大臣一座の後身の国王一座もまた、特権劇団であった。彼らが特権的であったことの意味を、*REED* の資料その他を手がかりに検証する。

第 2 室 (121 教室)

司会 山口大学教授 池園 宏

1. 幽霊、疫病、占星術

——*The Haunted Man* における近代的社会意識形成と得体の知れないメディア

北九州市立大学大学院博士後期課程 原田 昂

本発表は、Charles Dickens の *The Haunted Man* 分析から、全体性やある全体を形成する要素に対する Dickens の意識を読み解き、本作品をメディア革新による 19 世紀的な社会意識の中で重要な作品として位置づけるものである。

新しいメディアの登場によって近代は、もはや人間同士の直接的な交流だけでは説明できないような、巨大な集団が生まれる環境となった。この正体不明な、しかし確実に人々を集団の一員とする得体の知れなさは、本作品において幽霊のイメージで表現される。これは単純なメタファーではない。本作品の幽霊は、人々を感染させる疫病のような性質をもつ点で、明らかに他者への影響が意識されている。また作中人物の内、幽霊に憑かれた Redlaw と、子供の幽霊を見聞きする Milly は、ともに他者に影響する人物である。さらにこの 2 人について、influence の語源である占星術的な知識を基にした読みが可能であることから、本作品における全体性とその媒介についての意識を読み解く。

司会 山口大学教授 宮原 一成

2. 反ヒロイン、バスシバの成長とグランディズム

——『狂乱の群れを離れて』再読

福岡女学院大学短期大学部准教授 今村 紅子

編集者レズリー・スティーヴンから『コーンヒル』誌への連載依頼を受けて、トマス・ハーディ(Thomas Hardy)が執筆した『狂乱の群れを離れて』(*Far from the Madding Crowd*, 1874)は、雑誌向けのプロットや、道徳律に反することに過敏なグランディズムの制約のなかで、「連載物の上手な書き手」を目指してハーディが書き上げた作品である。牧歌的雰囲気の中、恋の駆け引きや結婚問題を前に、理性と感情のはざまで揺れ動く、奔放で勝気なヒロイン、バスシバ・エヴァディーンは、忍耐強い農夫のオウク、生真面目だが激情に支配されがちな農場主のボールドウッド、都会風で頭も切れるが女たらしのトロイ軍曹を前に、女農場主としての男勝りな理性と、感情に溺れる女としての自我の間で分裂し萎縮していく。ハーディは作品執筆の過程で、因習や道徳律を侵す恐れのある箇所は、編集者からグランディズムの名目で、削除や改変を余儀なくされた。『狂乱の群れを離れて』でハーディが描いた等身大のヒロイン、バスシバ誕生の裏に潜む、グランディズムに対するハーディの密やかな抵抗と、新たな反ヒロイン像について読み解いていきたい。

3. Wild Irish and Gentle English Stereotypical Imagery in Grace Stebbing's “Wild Kathleen, or Both Sides of the Channel”

鹿児島大学大学院博士後期課程 Nikolay Gyulemetov

“Wild Kathleen, or Both Sides of the Channel” (published serially in 1881) is a short novel by Grace Stebbing about three young girls in late Victorian England. Throughout the story Kathleen is depicted as a rebel, refusing to conform to the rigid image of a Victorian lady, challenging the rules and getting herself and her friends in trouble. The depiction and development of the characters shows a variety of stereotypical imagery (social, gender, moral and ethnic) about what young girls are and can aspire to be. The purpose of this presentation is to discuss the role and influence of this imagery as part of Stebbing's work as well as its position in the Victorian educational system for young girls.

司会 九州大学教授 鶴飼 信光

4. 出版文化的視点からみる 18 世紀イギリス小説——作家、書籍商、そして読者

活水女子大学教授 井石 哲也

今日、文学史に名を残している 18 世紀イギリス小説には、時代背景を反映した興味深い出版経緯を辿った作品が多い。デフォー研究で著名な Max Novak が‘Age of Disguise’と呼んだ、匿名によるフィクション出版が数多く存在した小説勃興期から、リチャードソンを経て、「作家」のステイタスを強く主張した 18 世紀後期のスターン、さらには 19 世紀初頭のオースティン登場にいたる小説ジャンルの興隆には、組織化する書籍商の存在と「貸本屋」の流行が不可欠な要素であった。人気小説誕生の背景には、作者自身と書籍商が連動する形での、積極的な売り込みや独自の商法が多く存在していたことは見のがせない。当時の小説の読者は、作者と作品の両方に関心を向けながら、本を購入し、あるいは借り出し、読書が必須の生活習慣として定着していった。本発表では、このような小説流行の背景について、出版文化あるいは書物史的視点から紹介、考察する。

5. 【発表なし】

第 3 室 (125 教室)

1. 【発表なし】

2. Tim O'Brien の *If I Die in a Combat Zone* と *The Things They Carried* における戦争体験の記憶と「真実」

熊本県立大学大学院博士後期課程 三牧 史奈

Tim O'Brien は *If I Die in a Combat Zone* の出版後 20 年を経て、同じような構造やプロットを持つ *The Things They Carried* を書いた。彼はこの 2 作品を通して、ヴェトナム戦争を幾度も語り直すことにより、戦争体験の記憶の本質と人間精神との関係そのものを描き出そうと試みているのだ。実際にヴェトナム戦争体験を持つ O'Brien は、自身の中に生き続けるヴェトナム戦争の記憶と、時の流れが持つ作用について探求し続ける作家であると見なすことが出来る。つまり彼が提示するものは、戦争の記憶と共に生きる戦争体験者にとっての「真実」なのだ。

本発表では、Tim O'Brien の *If I Die in a Combat Zone* と *The Things They Carried* との比較を通して、記憶や真実の本質とはどのようなものか、そしてそれらはいかにして表象し得るのかという、歴史と過去の＜真実の表象＞に対するポストモダンの懐疑について明らかにする。

司会 近畿大学准教授 青井 格

3. ドナテロとジュリア・パストラーナ ——『大理石の牧神』におけるノンデスクリプト表象

長崎県立大学特任講師 生田 和也

『大理石の牧神』のドナテロは、語り手が彼について＜語れないこと＞が大きな特徴になっている。例えばドナテロの似姿である作中の牧神像は「言葉で表現するのは不適切」(CE IV 8)であり、ドナテロには「定義できない特徴」(CE IV 14)があるとされる。

ホーソーンは実際に牧神像を見物した際に「あの醜い、顔に毛のはえた女」(CE XIV 173)を想起したと日記に書き残している。この際に彼が連想した女性は、ジュリア・パストラーナであったと想定される。この女性は全身が体毛で覆われていたことから見世物興業に従事させられた人物であり、1857 年のロンドンの新聞広告には、＜ノンデスクリプト！ジュリア・パストラーナ嬢＞との文字が躍る。ノンデスクリプト(Nondescript)は＜得体の知れない存在＞を意味し、見世物興業の宣伝文句として頻繁に用いられた語であった。

本論は作中で＜語れないこと＞が特徴となっているドナテロの人物像を、上述したノンデスクリプトの文脈に位置づけて論じる試みである。

司会 九州大学教授 小谷 耕二

4. Karen Tei Yamashita の文学の境域性 ——ローカリティとグローバリティにおける日系アメリカ人文学の再定位

琉球大学教授 喜納 育江

Karen Tei Yamashita の文学は、文学をはじめ多様なメディアによる表現を通して、移民体験や強制収容所体験などの日系人共同体の歴史的記憶を次世代に伝えようとしてきた日系アメリカ人の表現の流れに共感しつつ、日系アメリカ人のアイデンティティのあり方を、よりグローバルで現代的な文脈から織り直す語りを展開してきた。Yamashita が生まれ育ったカリフォルニア州は、人種も文化的背景も多様な人々がひしめく場所であるが、Yamashita を含む「日系アメリカ人」の表現者たちは、そのローカルな記憶と同時にグローバルな記憶を共有する人々のネットワークの中に、自らの「日系アメリカ人」としてのアイデンティティを再定位しようとしている。本稿では、「場所」、「共同体」、「境域性」という概念を手がかりに、日系アメリカ人の表現者が、ローカルかつグローバルなネットワークの中で、自らの位置をどのように定位し、新たな物語の創造へとつなげているかを、Yamashita の文学を中心に考察する。

5. 【発表なし】

第 4 室 (129 教室)

1. 【発表なし】

司会 熊本大学教授 登田 龍彦

2. 提示の There 構文に関する統語的考察

九州大学大学院修士課程 福地 瑤美

There 構文はその語順や動詞の種類によって 2 種類に分類される。(Milsark (1974))

(1) 存在文

- a. There is a man in the room.
- b. There exists a man in the park.

(2) 提示の There 構文 (Rochemont & Culicover (1990))

- a. There walked into the bed room a unicorn.
- b. There crossed her mind a most horrible thought.

存在文では、be 動詞や存在・出現を表す非対格動詞が用いられ、動詞の直後に意味上の主語が現れる。一方、提示の there 構文では、(1)に生じる動詞以外に非能格動詞や他動詞を用いることが可能であり、意味上の主語は文末に現れるという特徴を持つ。

Nakajima (1996)や Nishihara (1999)らの先行研究においては、場所句倒置文と関連づけて分析しているなど興味深い点も多いが、非能格動詞や他動詞も生じうるという提示の there 構文の特徴に対応できていない、ミニマリスト分析にはそぐわない等の問題点もある。したがって本発表ではそれらの問題を解決し、存在文や場所句倒置文と比較しながら、提示の there 構文の特徴を捉える派生の考察を試みる。その際、Rizzi (1997)の CP カートグラフィ分析とパラレルな構造を vP 領域内にも想定する分析(Maeda (2008))を援用し、統語的に上手く説明できることを論じる。

3. 空移動仮説の再検討——自由併合と素性継承の観点から

福岡大学外国語講師 谷川 晋一

本発表では、Chomsky (2013, 2014) で提案、示唆されている自由併合と素性継承に関する理論的観点から、TP 指定部から CP 指定部への移動は生じないとする空移動仮説の再分析を行う。

Chomsky (2014) は、自由併合の観点から、TP 指定部への移動が生じ、その後、C から T への素性継承が生じるという従来とは異なる可能性を示唆している。本発表は、この示唆を採用した上で、*Wh* 主語構文の環境においては、C が持つ ϕ 素性と Q 素性が一度に T へ継承される必要があるため、*wh* 主語は TP 指定部にとどまると主張する。*wh* 目的語との比較を行いながら、この分析の妥当性を示した上で、本分析が *wh* 主語と *wh* 目的語の統語的違いを容易に説明できることを示す。また、本発表は、これと同様の分析が話題主語構文にも適用されると主張する。文主語に焦点を当てながら、この分析の妥当性を示し、かつ、名詞句主語にも同様の分析を仮定することによって、話題主語と話題目的語の統語的違いが本分析から適切に導かれることを示す。

司会 福岡大学教授 古賀 恵介

4. 日英語の構文ネットワーク構造の広がり

熊本県立大学教授 村尾 治彦

英語は他動詞を、日本語は自動詞を好むという類の主張や、それが状況の中、外どちらからの事態把握を好むかで決まるという主張が多くの研究でなされてきた（寺村 (1976)、池上 (1981)、Hinds (1986)、中村 (2004, 2009)、谷口 (2005)、本多 (2005)、野村 (2014) など）。本発表では、構文ネットワークという単位の中で、各構文のスキーマの活性度の観点からこの日英語の違いを捉え、英語は様々な他動構文においてより高次のスキーマが活性化して、多様な他動構文を生産し、日本語は自動構文においてより高次のスキーマが活性化し多様な自動構文を生産することを主張する。

そして、ネットワークの上位に広がる際には、他動構文は使役構造を、自動構文は自律構造を、「主体的」に捉えて拡張していくことを主張する。日英語におけるこの広がりへの違いは状況の内外認知だけでは捉えきれず、英語は際立ちに基づく *natural path*、日本語は自律性に基づく *natural path* (cf. Langacker (1991)) の観点から、異なる主体的な事態把握によって動機付けられている可能性を検討する。

5. 【発表なし】

特 別 講 演 (211 教室)

司会 九州大学教授 鵜飼 信光

演題 小説と映画について

講師 京都大学大学院教授 佐々木 徹 (ささきとおる)

講演内容

小説と映画の関係について、*The Great Gatsby*、*Great Expectations*、および“An Occurrence at Owl Creek Bridge”のアダプテーション (1974 年ジャック・クレイトン監督、1946 年デイヴィッド・リーン監督、1962 年ロベール・アンリコ監督) をとりあげて具体的に考察する。とくにビアスの小説と映画については詳細なテキスト分析を行う。アンリコの映画はアカデミー賞 (短編部門) を受賞するなど高い評価を受けたものの、文学研究家による評判は必ずしもよくない。映画には肝心のアイロニーが欠落しているというのがその最大の理由であるが、この通説に修正の必要があることを例証する。(アンリコの映画は 26 分という短いものですが、講演の中で全部おみせする時間はありませんので、YouTube を活用するなどして予習していただければ幸いです。妙な音楽が入っているバージョンがありますので、それは避けるようご注意ください。)

講師紹介

佐々木 徹

1956 年大阪生まれ。1984 年京都大学文学部大学院文学研究科博士後期課程中退。

【共編著】『ディケンズ鑑賞大事典』(南雲堂)、*Dickens in Japan: Bicentenary Essays* (大阪教育図書)、【翻訳シリーズ監修】『ウィルキー・コリンズ傑作選』(臨川書店)、『20 世紀イギリス小説個性派コレクション』(新人物往来社) (共同監修)、【テキスト校訂・編集】Thomas Hardy, *The Hand of Ethelberta* (Everyman Paperback)、Wilkie Collins, *Miss or Mrs?*, *The Haunted Hotel*, *The Guilty River* (Oxford World's Classics) (Norman Page と共編)、Mary Elizabeth Braddon, *John Marchmont's Legacy* (Oxford World's Classics) (Norman Page と共編)、G. K. Chesterton, *Charles Dickens* (Wordsworth Editions)、【項目担当】*Oxford Reader's Companion to Hardy* (Oxford UP)、*Charles Dickens in Context* (Cambridge UP)、【翻訳】マイケル・スレイター『ディケンズの遺産』(原書房)、『エドマンド・ウィルソン批評集』(みすず書房) (共訳)、チャールズ・ディケンズ『大いなる遺産』(河出文庫) などの著作がある。